

「身近な水」を大切にするための授業実践

中村 匡子（滋賀大学大学院）

1. はじめに

前年度に修士論文「小学校における『身近な水の大切さ』を主題とした環境教育のための教材開発」で取り組んだ内容をもとに、児童が身のまわりの環境について考えたり実践したりしていくための原動力になるような授業の構築について研究を続けている。本研究では、人間や生き物が生きていくのに不可欠な「水」に、児童がじっくりと向き合う必要性を感じ、「身近な水」を大切にするための授業を再計画し、実践した。計画の作成に際し、以前から活用している資料や写真を見直し、学習展開を工夫した。

2. 授業実践

2-1 学習設定

第4学年の社会科「くらしと水」の発展として総合的な学習の時間で実践した。全1時間を計画し、「身近な水」の存在に関心を持ち、びわ湖の存在価値について考え、自分の水の使い方やくらしぶりをふりかえることを学習のめあてとする授業実践を行った。



2-2 教材開発・工夫

○淡水の大切さ：「淡水」の必要性を児童に考えさせるために淡水と人工海水の飲み比べをし、「淡水」の総量を意識させるため掲示図を活用した。

○富栄養化のしくみ：フラッシュカードや写真を用いた。自分たちの水の使い方をふりかえらせ、今後できそうなことを考えるための材料とした。

○天然の水がめーびわ湖：びわ湖の水は天然水であるという認識を持たせ、湖上から撮った取水口（浄水場）や排水口（下水道浄化センター）の写真を用いて、びわ湖の水の恩恵について考えさせた。

びわ湖は淀川流域の貴重な水源であることを意識させ、水源（周辺の森林）についても目を向けさせるため上空から撮影された流域地図（Google MAP）を用いた。



3. 成果と課題

授業後に、児童が「身近な水」への関心を高め、その「大切さ」に気づいた様子がみられたことから、本授業の効果があったと評価している。児童の学習記録や発表をみると、社会科で学習した内容と自分たちのくらしの実際とをつないで考えることができたようだ。平成23年度以降も第4学年で生活と水との関わりを取り扱う予定であり、自分のくらしと水との関わりを考えさせる機会になるこのような学習を「環境教育」として継続させていきたい。都市計画等の影響を受け、児童だけでなく大人も学区を流れる河川やびわ湖に立ち入ることが難しくなっているが、児童が実際に「身近な水」に触れることができるような教材開発も含めて、今後も「身近な水の大切さ」を考えていける環境教育の教材開発を進めていきたい。